

# 古都幻影

——川端康成の生命の木——

辻 憲 男

A Note on Yasunari Kawabata: Koto (The Old Capital, Kyoto)

Norio TSUJI

【要 旨】川端康成の『古都』（昭和三十七年）の読解と引証。小説の基調を「木と花の生命観」ととらえ、主題を「双生の姉妹のそれぞれの生の孤独」と考えた。本文をたどってそれらの証を例示し、また京の人と町と自然とが交感する物語の構造について考察した。さらにこの小説の基底にある、作者の竹取物語幻想なるものについて私見を述べた。

【キーワード】『古都』、川端康成、北山杉、生命、竹取物語

## 木と花の生命観

川端康成の小説『古都』（昭和三十七年刊）は、「春の花」の章に始まり、年暮の「冬の花」の章に終わる。春の花は桜、冬の花は北山杉である。これは人物の上では千重子から苗子へつながる一すじの道である。序章ではもみじの古木、すみれ、蝶が、千重子の観想を通してとらえられる。古木は母親であり、二株のすみれは生き別れたふた子の姉妹である。白い蝶は姉妹をめぐる人たちであろう。その意味はまだ隠されているが、ここに作者の生命観のおのづからのあらわれがある。古木は人の姿を思わせ、千重子の「からだ」を喚起する。幹は腰まわりより太く、腰ほどの高さで曲がり、小さいくぼみにすみれが花をつける。千重子は花の「生命」や「孤独」を思い見る。わが出生を知らぬ千重子は、人間も同じだと思ふ。本来の意味の「生」*being*があり、作家独自の生命のエロティシズムがある。

千重子という名づけに意味があるとすれば、生命の永遠を言うのであろう。対にならない「苗子」の名は、文字どおり若い早苗である。<sup>①</sup>この作家における理想的な女性と、純粹自然の処女を体现する。元は双生の二人であるが、今は性格も境遇も大きく異なる。千重子を華やかな曲線とすれば、苗子は伸びやかな直線、——桜と杉ほどの違いがある。そうして小説は四季の木と花を織り込みつつ進行する。

千重子が花なら、苗子は木である。千重子は平安神宮の桜も北山杉も好きだが、気持ちは散る桜から北山杉へと向かう。苗子と杉とは、後に見るようにほとんど同体一如である。

次に石燈籠と鈴虫がある。燈籠の浮き彫りは千重子にはマリアかと思われたが、子を抱いていない。キリスト像らしい。意識下の孤児性を暗示するものである。虫もまた「狭く暗い壺のなかで、生まれ、鳴き、卵をうみつけ、死んでゆく」。すみれと鈴虫の孤独な生命は、実の親を知らない千重子のかなしみでもある。作家自身の孤独な死生観がある。

美しい盛りの千重子には桜が似合う。神苑の紅しだれ桜は、枝も花も「じつに女性的だ」が、盛りの間も花は散る。

「あたしが幸福……？」と、千重子はまた言った。目に憂愁のかげが、ふと浮かんた。うつ向いたので、ただ、池の水が目につつたようでもあった。／しかし、千重子は立ちあがった。／「橋の向こうに、うちの好きな桜があります」／「ここからも見える、あれね」／その紅しだれは、もっともみごとであった。名木としても知られている。枝はしだれ柳のように垂れて、そしてひろがっている。その下に行くと、あるなしのそよ風に、花は千重子の足もとや肩にも散った。

〔表記は単行本『古都』による〕

孤独な生の確かな証しとは何だろう。千重子はその出生の根源を求める。はかない花ではなく、生命の根幹の木。「この庭としては高い松の群れが美しく、そして神苑の出口だった」。千重子は己の必然として常盤木に向かうようだ。作者は杉の村に双生の妹を住ませた。

## 人間の親の捨てた子

桜見の夕暮れ、千重子は真一を清水の舞台へ誘う。「幸福」と見える自分の真実を明かしたかった。「うちにはほんまに京の町で生まれたんやろかと思うのどす」。我が忝たる出生を告げるには、町を一望する高所がふさわしい。この都の夕闇に捨てられた。それにしても「千重子がなぜ、こんな告白を、ここですか」、むろん作者が王朝文学以来の、靈驗あらたかな観音の霊場を選んだのである。

清水の観音は源氏物語・夕顔や枕草子、更級日記などに見えるが、邂逅に関わるのは山椒大夫や桜姫清玄の話である。参詣・参籠によって運命がめぐり、物語が展開する。小説では祇園祭りの宵山の奇跡を呼び起こす。

「春の花」に続く「尼寺と格子」「きものの町」の二章は、千重子の日常と京の人々の気質をこまやかに綴る。養父母はことのほか千重子を愛したが、元より血のつながる親子ではない。人ぎらいの父は嵯峨の尼寺に隠れ住む。古来、隠者の孤独は竹林の離俗に通じる。このような父娘の間は竹取物語に似る（後述<sup>3</sup>）。

「尼寺」の竹林に対して、「格子」の商家へは花売りの白川女が来る。「花といつても、さかきである。さかきといつても、若葉である」。「うち、野草が好きやの、ようおぼえておくれやして……」。ふとした会話にやさしく地味な千重子の心根があらわれる。

母はおそろしいことに、千重子を夜桜の祇園さんでさらったと言う。千重子是否、店のべんがら格子の前に捨てられていたと聞いている。赤子を神の授かり子とする観念がある。「世のなかには、いつどこに、玉が落ちてくるかしれへんやろ」。子のない夫婦に「玉」のような子が授かるというのも、古伝説や昔話の常である。

「きものの町」の初めに、京の木の葉の色やしだれ柳の並木の美しさを言う。どれもきれいでやさしくやわらかだ。織屋の宗助は植物園の楠の並木を好んだ。太吉郎が千重子の帯を頼むが、息子の秀男はその下絵に感心しない。花やかで派手だが、「あったかい心の調和がない。なんかしらん、荒れて病的や」。クレエの絵のせいではなく、隠遁の心の荒涼が見えるのだろう。「おやめやす」「おうちへお帰りやす」。娘に対する「愛情の色」の何たるかを、秀男の直感が見抜いている。木や花の生命を観じることなく、我執に囚われる太吉郎の独善を衝く。作家自身の厳しい芸術観が、この場面の二人の対立にあらわれてもいる。前の木や葉の自然な美しさと、これに似せるひ弱な創作との皮肉な対照でもある。それほどに植物は生き生きとし、人間の所業は小さく弱々しい。

御室の桜、松のみどり、若葉、植物園のチュウリップ、楠の並木、加茂川原の若草。太吉郎への秀男の返答を継いで、作者は、

花は生きている。短い命だが、明らかに生きる。来る年には、つばみをつけて開く。——この自然が生きてるように……。

と書く。千重子は「中宮寺や広隆寺の弥勒さん」よりずっと美しいが、花も娘も咲いてはしほむ。「そやさかい、チュウリップの花は生きてる」のだ、と秀男は言う。織る帯のごときは、生き栄える生命には及ばない——それは千重子

に「西陣の手機の運命」を語ったことにも通じる。木と花が人々を生かしている。

京言葉の会話は軽くも深くも周到である。千重子の美しさは見事に理想化されている。秀男のこだわりも千重子への思いも、若緑のように際立つ。

ただし千重子の気持ちは、覚えず真一のほうにひかれるものがある。秀男の話題は聞かず、「絶対服従」の言葉からふと稚児姿の真一を思い出す。あとの「祇園祭り」の章でも思い出す。「北山杉」の章では真砂子の「自由」をうらやましく思う。仕方のないことながら、育ての親への氣づかいや遠慮が働いているのである。

古来、人をつ木と見なす。千重子と木に共通するのは孤独な生命である。杉の群生にひかれるのもあるいは一つ木の寂しさゆえかもしれない。養父母との疎遠は感じなくても、血のつながりの無いことは埋めようがない。住吉物語や落窪物語などの古い継子譚も思われる。小説の深部にあるのはそのような孤児の悲しみの感情である。

### 生命の根源の北山杉

物語が転回するのは、全体の前三分の一あたり、次の「北山杉」の章からである。暗示的な「運命」の語がすでに出了。「花も花だが、千重子は若葉、新緑を見に行くのも好きであった」。「北山杉のまっすぐに、きれいに立っているのをながめると、うちは心が、すうっとする」。杉山の魔性にひかれるように、千重子は己が生命の根源にめぐり逢う。何でも無い偶然のようであったが、千重子には、

まったく思いがけなく、あの娘の目が浮かんで来た。働くすこやかな姿のなかの一点、濃いような、深いような、目に沈んだ、うれいである。

と、何か「うれい」の交感が印されたのだろう。その日の夕は、北山杉ともみじの老木の話になった。「人間の心もあんな風やったら、ええなと思うのどっしやるか」。千重子は「いいえ、まがったり、くねったり……」と、老木の

ように強くない。すみれや燈籠の聖像のように心細い。不意に、自分の出生の場所を問う言葉が出た。夜桜のかぐや姫とでもいうのか。真砂子が瓜二つと言ったのを「ぼんやり思い出していたせいか……」。昼間の一瞬の光景の残像もあろう。しかし確かな答えは返らない。不安の叫びのように、その夜は夢にうなされた。生命の根源を求める、生まれ落ちる苦しみの夢である。杉山の村があたかもその地であるかのように浮かび上がる。

夢封じのような鞍馬の竹伐り会の日、秀男が帯を持参した。千重子が帯を腰に巻くと、頑なな太吉郎も「顔をゆるめた」。秀男もうれしそうだったが、本当の和解ではないようだ。

次の「祇園祭り」の宵山の奇跡は、一篇の中央の山である。先に千重子は「忘れんとおこ、一生、忘れんとおこ……」。人間かて、心しだいかしらん」と自分に言い聞かせた。上の悪夢や和解をさしたとも、以下の奇跡を予知するものとも解される。湯波半の古い大黒柱をなでた。高く真直ぐなひのきは千重子の心中の願いでもある。

「姉の行方を知りとうて……。あんた、姉さんや。神さまのお引き合わせどす」と、娘の目に涙があふれた。／＼たしかに、あの北山杉の村の娘であった。〔中略〕千重子は踏みしめて立つ、足がふるえるほど、心がみだれていた。すぐこの場で、ととのえられるものではない。ただ、ささえていてくれるのは、その娘のいかにも健かな美しさのようだ。千重子は娘ほど、素直によるこべはしなかった。うれしい色が、目に深まって来そうである。

秀男に呼びとめられた苗子の反応も面白い。「千重子はふた子であることを、この男に知られたくないのだ、それで二人のそばへ来ないのだと、苗子は思うほかはなかった」。避けたのは大きな動揺のあとだからである。直後に千重子は真一に声をかけられた。その兄も一緒だった。このあたりの運びは少々作為が感じられるが、後の章に連なって展開するための用意でもあろう。

「千重子は胸を突かれた。／＼あの村へ、よく行きたくなるのも、美しい杉山を見あげたくなるのも、父の霊に

呼ばれてではなかったのか。千重子の揺れは簡単におさまらない——自分はふた子の一人で、捨てた父も母ももうこの世にいない。父は杉の枝打ちをしていて亡くなった。苗子は「心がうちより純で、よう働いていて、からだもしっかりしてるらしいわ」。目をつぶると、中川のきれいな杉山が浮かんだ。

苗子は杉の精のように杉と一如である。作中に四度、春夏秋冬の折節にあらわれる。

(1) 清滝川の岸に、急な山が迫って来る。やがて美しい杉林がながめられる。じつに真直ぐにそろって立った杉で、人の心こめた手入れが、一目でわかる。銘木の北山丸太は、この村でしか出来ない。〔北山杉〕

(2) 「きれいな杉木立が好きで、たまに来ますのやけど、杉山のなかへはいったんは、はじめてやわ」と、千重子はあたりをながめた。ほとんどおなじ太さの杉の群れが、真っ直ぐに立って、二人をかこんでいる。〔秋の色〕

(3) 「ここでは、杉の化粧をしたげて、あたしはお化粧なんて、せえしまへんえ」／それでも、口紅だけは、薄くつけているようであった。〔松のみどり〕

(4) 二人はしばらく、だまって歩いた。／北山杉は、じつにこずえの方まで、枝打ちしてあって、千重子には、木末に少し、まるく残した葉が、青い地味な冬の花と見えた。／もう、いいと思って、千重子は苗子に言った。

〔冬の花〕

いずれも単なる背景ではない。文章上も木と人物が融合している。姉妹が触れ合う時、必ず杉林の生命が羽ぐくもる。若葉の(1)の行き逢う場面では苗子の杉山の生業が語られる。「男たちが杉丸太の皮の荒むきをしたあとで、さらに女たちが、ていねいに小むきする」「菩提の滝の砂を、水または湯でやわらげて、丸太をみがく」。「人間の娘も、あの杉みたいに、真っ直ぐに育つとええかしらん」。

(2)では夏の夕立ち、(4)では北山しぐれに遇い、姉妹が抱き合い愛し合う。群生の杉林の中で孤独な生命が結び合う。主役は苗子である。(3)の秋山では妖しく美しい魔性のような天性を(秀男に)見せる。

大佛次郎の随筆「京都の誘惑」は昭和三十六年三月刊の『京都』に載った。作中千重子がくりかえし読んだとあるのは同年七月のことで、この部分の新聞掲載は十二月五日である（大阪版、第59回）。作者としてはここにぜひ引用しておきたい文章であつたのだろう。

「北山丸太にする杉の植林が層雲のように青い梢を重ねたのと、赤松の幹を繊細に明るく列ねた山全体が音楽のようには木々の歌声を送って来る……」

という「ひとくさり」である。大佛の原文の文末は「送って来る素晴らしさ。」とある。人世の「祭りばやしや、祭りのざわめき」よりも、木々の歌声のほうが千重子の心に響く。

この対照法は絶妙の用意である。次の「秋の色」の章で、千重子は「杉と赤松の山」の帯を秀男に頼むからである。そもそも大佛の文章が、京都の山と木に言及するところが多い。曰く、自然が人手に依ってみやびであり、樹々の色が多彩で豊かである。「山の美しさがなかったら、美しい京都はないかも知れない」。山紫水明の都と言い、「京の女たちが美しいのは、水のせいだと古くから言い伝えられている」。それに花や紅葉、寺と史跡、人と町の多彩。まさに「誘惑」の生じる本然をとらえた名文である。『古都』の作者は大いに刺激を受け、おのずと同じ素材を用いることになったのでもあろう。

### 行きめぐる姉妹の愛

京の夏から秋、冬へ、姉妹は互いの愛を求め合う。「秋の色」「松のみどり」「秋深い姉妹」の三章は、それに秀男と竜助がかかわる。太吉郎の昔遊びは軽妙だがものさびしい。市電も茶屋も、時勢の波がきものの町の旧習を押しやる。折しも千重子は秀男に人違いのことを明かした。苗子は千重子の「幻影」や「身代り」ではないが、苗子のために「杉と赤松の山」の帯を頼んだ。



実の父母の不在を知ったあとの盆や大文字は、「新しいかなしみもあった」。まさしく、上引②のあと、苗子は千重子に「人間のつくった杉どすもの」と言う。原生林ならぬ杉山は「切り花」のようなものだ。反撥だろうか。趣味的なものでなく、苗子には生活の杉山である。千重子は驚く。「人間は、大好きどすけど……」「そやけど、人間て……」。人爲によるふた子のかない「運命」を、杉林に重ねて作者が鋭く言い当てたものだろう。激しい雷雨に、姉妹は母胎のなかのようにあたたかく抱き合う。杉山＝母胎回帰はもはや比喩ではない。稲妻と雷鳴が内面の激動を演出する。しかし親や生家のことを尋ねると、苗子はきびしくこぼんだ。不要のことだ。孤独に生きて来た苗子には、ただ一人千重子だけが生の証しのように思われる。過去になすまない。馴れ合わない。「お嬢さん」の生い立ちとは違う。千重子の今の（お嬢さんとしての）生活を乱してほしくない。その気迫に千重子は打たれ、かなしく受けとめた。春のように優しい千重子は冬のように強い苗子にはかなわない。

千重子

お嬢さん

きものと帯

京の町

人界（俗）

花

杉林

苗子

奉公する娘

働き着

山の村

自然界（聖）

杉

原生林

もの言いの対照によっても、性格が見事に描き分けられる。（ある意味で）苦勞知らずの千重子は明るく善意でやわらかい。捨てられなかった苗子が（かえって）不人情を知る頑なな孤児である。養父母にあたたかく愛された姉と、孤独に負けじと気強く観念した妹と。華奢なお嬢さんはあまえ、働く娘は身を以て庇護する。苗子は「冬の花」の章に、「あたしは気が強うて、人一倍働きますのやけど、泣虫どすさかい」とある。体も「かたく身がはいっていた」。しかし「身代り」の帯をもらうのはいやだった。弱気にならないための意地もある。世間をよく知っている。別れ際に、「お嬢さん、お店を少し、おてつだいしておみやしたら、どうぞさやう」とまで言うのだ。

苗子は千重子の今の生活に馴染むことはしない。姉が生きていることを心強く思うだけだ。共に鈴虫のように寂しい生命である。

中間の「松のみどり」の章は苗子の美しさを主とする。前段、千重子は青蓮院の楠をながめ、父母に幹や枝の力強さを語る。自然の老木は、「いわば栽培された」北山杉ではないものの、京の「大きい盆栽」のようなものだ。人が手を入れた樹木、とは先の大佛の洞察である。南禅寺近くの白萩や杉も点出する。『古都』はさながら京の植物誌である。次いで千重子は信頼する竜助からも店の経営を勧められる。苗子の示唆が形になる。若い人たちによって京の商いも変わる。

帯を織る秀男の中で、「千重子と苗子とが、一つになってしまふ」。帯は千重子が「身代り」として贈るのだが、元より苗子は「身代り」ではない、「会うただけで、よろしおす」ときっぱり言うのだ。

とは言え、作者において二人は一人である。昭和二十四年の短編「しぐれ」に、須山と「私」が馴染んだ、「二人で一人、一人で二人」の双生児の娼婦が出て来る。浅草の雷は右の夕立ちの場面を思わせる。「一人で生れて来るところをどうして二人で生れて来たんだ」「そうね」云々。さらに四十七年の遺作「隅田川」では、育ての母が姉（産みの母）と似ていることを否定するが、幼い行平は二人の母は一人のようだと思う。その記憶は後に双生児の娼婦「たき子」の爪から呼び覚まされた。「二人で一人、一人で二人」とは鏡像のような二面性をいう。姉―妹はやさしさと冷静さ、うつつと夢幻、あるいは明界と幽界を分け持つ。千重子と苗子もその類型と見られる。鏡面と言うより文字どおり分身である。「お嬢さんが、今みたいに、お困りやしたら、うちは死んでも、かばいにいきますけど……」。杉山の異界に住む精霊（幻影）か、もしくは実在する守護霊（守り神）かの言葉のように聞こえる。それが大佛の言う霊力ある「木々の歌声」でもあろう。

谷あいの村は幽暗の境となる。虹、川原の小石原、枝から落ちた父、金もくせい、紅いうるし、金色の夕焼け。山に植物の寂しい生命がある。翁が「野山にまじりて」竹を取ったごとく、木を切り出して人の用にする。千重子が夜桜のかぐや姫なら、苗子は杉林のかぐや姫である。若く健康な生氣と、豊かにこぼれる髪がなまめかしい。京の町の

洗練とは異なるなまなましい自然の体がある。瓜二つであっても、決して千重子の引き写しではない。時代祭の日の苗子は、秀男には松の緑の生命とも映った。

「秋深い姉妹」では姉妹の愛が交錯する。千重子は竜助の「はげしい言葉」に動揺し、秀男は苗子に思いを寄せる。折から十一月に一斉の機休みがあった。室町も西陣も上七軒もさらに確かに変わりゆく。

### 孤独を生きること

終章の「冬の花」は、孤独な一つ木の片われどうしの抱擁と別れである。二人は互いが生きていると思っていて生きていく。その後の男女の愛がどうなるかは、すでに物語の主題の語るべきことではない。

苗子は千重子らに迷惑がかからぬよう、自らの行く道を予告することく、「もっと、もっと、山奥へかくれてしまいたいのだすけど……」とまで言う。千重子の世間体をはばかりのである。ましてこの小説においては、山の異界に住む分身としての苗子である。かぐや姫ではないが、人界の男とは結婚せずに終わるであろう。作者の「予感」では、千重子もまた竜助や真一と結婚することはないという。分身の苗子はより自然に、聖性（処女性）を保つのだろうとさえ思われる。月ならぬ杉山の中へ、再び人界に戻って来ることはないかのように去って行く。

元より、「苗子の娘ごころ」は秀男の本心を読み、本尊の千重子の存在に「妬み」さえも感じた。しかし心のうちには本当に悲しくつらいのだ、姉とめぐり逢ったばかりに。苗子の抑制と決意がこの章の主調である。別離が近づいている。作者が先を急いだのではあるまい。物語は静かに急迫する。

千重子が苗子の顔をふくと、苗子は千重子の胸に、顔をおしつけて、かえって、よけいにしゃくりあげた。／「困るやないの。苗子さん。さびしいの。やめて」と、千重子は苗子の背を軽かたいたいて、「そない泣くのやったら、うちもう帰るわ」

——苗子の寂しい決心をあたたく包んでやりたい。雪が来る。せめても一度、中京の家に招いて抱擁したい。終  
局の夜は冷たい。

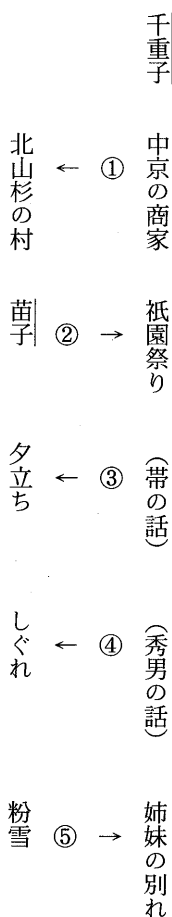
一夜が明けた粉雪の早朝は、

「お嬢さん、これがあたしの一生のしあわせぞしたやろ」〔中略〕「これは、あたしがあげるの。また、来  
とくれやすな」／苗子は首を振った。千重子は、べんがら格子戸につかまって、長いこと見送った。苗子は振  
りかえらなかつた。千重子の前髪に、こまかい雪が、少し落ちて、すぐに消えた。

と短く簡潔な結語である。「一生のしあわせ」とは人の最期のような告白である。冷たい雪のような非情は『雪国』  
の最後をも思わせる。永遠の別れのような、思い切ったきびしい訣別である。言葉どおり、千重子はべんがら格子の  
家から離れられない。気丈怜悯な苗子の心の中を、あたたかい肉親の血が流れている。すぐに消える雪は短い一夜の  
愛を形にした。北山杉の村はもっと深い雪の中にあるのだろう。

きものと帯、磨き丸太という二つの伝統産業が、二人の生きて行く道である。若い千重子の商売もようやく前途が  
開けて来る。

小説の場所は京と北山を歩き来した。



物語の主題は最後、遙かな北山杉の村へと遠ざかる。それはおそらく、人が生存の根源たる木の森に回帰する生命で  
あることを意味しているのであろう。

## 竹取物語からの声

川端の竹取物語への言及は早く「日本小説史小論」の中に見える<sup>③</sup>（『全集』第二十四卷）。姫君を主人公とする竹取物語と落窪物語の論が、中でも出色のものである。まず竹取の価値は主として想像の点、落想と構図の点にあると言う。いま『古都』の物語を考えるのに興味深いのは、

そして、赫夜姫に就て云ふならば、男を拒む理由も至極単純であつて、天界の女の驕慢なぞはなく、只管可憐である。書出しの「三寸ばかりなる云々」や「手に打入れて云々」や「籠に入れて養ふ。」は勿論、宮仕へせよと云はれて、「消え失せなん。」とか「死ぬばかりなり。」とか、だだをこね、帝の前で、「きと影に」なつたりする。  
〔中略〕 作者の心は、単純な「物語」であつたらう。そして、書出しと、月を見て泣く姫が、特に美しい。

とある部分である。あえて付会するならば、千重子も苗子もまさに赫夜姫のように可憐である。娘は天女のような純粹な心持ちで、男性に相對している。作者の心も單純な聖女の物語を意圖している。書出しの桜の精のような千重子と、最後の杉山へひとり帰って行く苗子が特に美しい。あえて言えば、『古都』の結構を最も單純化すれば、この竹取物語の構想に近くなるのではないか。かぐや姫は初め千重子として現われ、竹林の老夫婦に育てられ、中半以降に苗子の聖性に取って代わり、世俗に馴染むことなく別世界へ去って行く。かぐや姫ならぬ千重子は、眞実は杉山から人界に捨てられた赤子であつた。片や人間ならぬ「月を見て泣く姫」の面影は、「泣虫」の苗子の内性に多く印されている。

落窪物語は悲しい継子譚である。川端はその小節の最初に、

落窪姫が、私は非常に好きだ。前半の逆境代の姫は、読む度に涙を誘ふ。後半とんとん拍子の幸運は、一種の好都合話であり、情緒の点に於て、芸術的価値格段と劣る。〔中略〕喜劇が喜劇より難かしい如く、幸運は幸運より、作者の手腕を要する。／落窪姫が、殊に哀憐に感じられるのは、物縫ふ姫として書かれたことである。

と記す。つまり「観賞の心理より見れば」、美しいのは逆境にある孤児であって、後の結婚の話は「幸運ゆゑに」興味が薄れる。それが二十五歳の川端の正直な感想であった。「古都」の作者に引きつけて言えば、このような基底があったから、お伽話のような幸せな結婚を思うこともなく、また終章以後の恋愛「悲劇」を書くつもりもなかったのではあるまいか。

同じ「継母小説」の住吉物語には触れるところがない。ただ特に好きな御伽草子『鉢かづき』についてのみ、鉢かづき姫は、割合快いペイソスとユウモアを感じさせる。この時代通癖のめでたしめでたしも、この作なぞのが最も気にならない一つであらう。

と述べる（注2）。漂泊した後の姫の幸福に対しては寛大で肯定的である。

次に、昭和十二年（一九三七）刊の『現代語訳 竹取物語』がある。その詳細な「解説」文の終わりに、

竹取物語には求愛はある。が、恋愛は遂に一つもない。いや恋愛はおろか、本当の意味に於いて、人間の心と心とがびつたりと合ふ、さういふ親愛と交渉は一つもないのである。翁と姫との心の結びつきには、ややさういふ離れ難い、親愛の情がありさうではある。が、姫にとつて、若い娘にとつて、養父の愛は遂に生命の全部ではないのである。〔中略〕この物語は、一種のペシミスティックな色を帯びてゐる。と同時に、理想に対するほ

のかな憧れを持つてゐる。

云々とある。これはそのまま『古都』にも当てはまる。身を分けた姉妹の肉親愛は本来的に強く、養父母の愛情や恋愛はかない人為である。義理の親子愛は語られるが、千重子の「生命」においてはそれほど重みを持たず、小説の深部に関わらない。作者もまた血縁にこだわらず、世俗の愛に幻想を抱かない。それが効果をあげている。姉・妹の「孤独」に関しても（運命的に）ペシミスティックである。これ以後一代限り、別々に生きていくことにむしろ遙かな理想を見出してもいる。翁を思う千重子の心を動かすのは容易でない。秀男、真一、竜助らは難題簪の役である。

『古都』の季節は四月初めから十二月末まで行事暦のように進行する。連載は十月から翌年一月まで三ヵ月半であったが、終わりの時季を合わせた現在完了形になっている。対して竹取物語はすべて「今は昔くけり」と、過去にあった出来事として語り、今も山に不死の薬を焼く煙が立ち昇ると結ぶ。伝説話の形式である。物語は九段に分けるのが通説であるが（川端訳も同じ。『古都』も全九章）、およそ、

かぐや姫の生い立ち、貴公子たちの求婚、帝の求婚、かぐや姫の昇天

と展開する。分量は成人するまでの三ヵ月がごく短く、五つの難題話と帝の求婚が七割を占め、あとの天の羽衣と富士の煙が二割超である。作者用意の色好みの滑稽譚は、しかし物語の主目的ではない。ここに帝との交渉があつて三年後、「春の初めより、かぐや姫、月のおもしろう出でたるを見て、常よりも物思ひたるさまなり」とある。ついに姫の出生の秘密（月の世界での罪）と、八月十五夜に迎えが来るとの主題が明かされる。（『古都』の千重子の出生の秘密が明かされる。）その夜が来て、かぐや姫が羽衣を着ると「物思ひなくなりにければ、車に乗りて」昇天する。最後の夜が最高の見せ場である。

千重子が苗子に帯やきもの・草履を贈るのは何の意味であろう。自分だと思つて持つていてほしい。その好意は知らず苗子を千重子に近づけ、町の色に染めようとする。移し替えのように見える。しかし苗子は抵抗する、「あたしは、身代りは、もういやです。会うただけで、よろしおす」。身につけたのは時代祭の日だけだった。最後の朝も、千重子は苗子に「ひろうどのコオトと、折りたたみ傘と、高下駄とを」そろえた。それらはもしや苗子の羽衣ではなかったか。千重子の幸せに「ちょっとでもさわりとうないのどす」と言う苗子の心は、十五夜のかぐや姫のように「さびしい」。千重子の心も今は、かぐや姫を引き留める翁のように悲しい。

住吉連作の第三「住吉」は、昭和二十四年に書かれた。その住吉物語についての詳しい記述の間に、「あの源氏物語のあんなに多くの主要人物がほとんどすべて孤児、少くとも片親のない人達、この驚くべきこと」という一行があ

る。竹取も、落窪、住吉、鉢かづきも源氏と同じである。川端がひかれるのは孤独な姫君のゆえである。

四十五年の短編「竹の声桃の花」は、冒頭に、

竹の声、桃の花が、自分のなかにあると思ふやうになつたのは、いつのころからであらうか。／今はもう、竹の声は聞えるだけではなく、桃の花は見えるだけではなくて、竹の声が見えたり、桃の花が聞えたりもする。

とある。自然の中にある人間と、木や花の生命との不思議な交感である。植物感覚とも同化幻想とも言えようか。娘と竹の生命の幻想はすでに『眠れる美女』にも出ていた。その江口老人の回想の中に、

竹林の道を過ぎて、清い流れをさかのぼってゆくと、滝がとうとうと落ちていて、日の光りにきらめくしぶきをあげ、しぶきのなかに裸身の娘が立っている。そんなことはありはしなかったのだが、江口老人にはいつからかあったものと思われる。年取ってから京都あたりの小山のやさしい赤松の幹の群れを見て、その娘の心おぼえがよみがえる時もある。

というくだりがある。朝日のなか、竹の葉も幹も銀色であった。この部分の初出は、『古都』の連載が始まる前年である。

『古都』の千重子は遂に木にはならない。対する苗子はこの後もなお北山杉の娘である。二人の決定的な別れはそこに由来する。

## 注

(1) 「北山杉」の章に、「千重子」は太吉郎夫婦の命名とある。音の上ではチエコ・ナエコは一对のようでもある。連想は千年桜や杉苗の語に及ぶ。

(2) 説経節『山椒大夫』では厨子王の参籠。なお大正四年の森鷗外の同名の小説も、「徳川文芸類聚」所収の江戸板本に拠った。桜姫は古浄瑠璃『一心二河白道』の主人公で、清水の観音の申し子とする。近松の歌舞伎脚本がある。その他、御伽草子の



稀本『子やす物語』は双子の男女の清水奇譚である（『室町時代物語集』第四、『室町時代物語大成』第五所収）。ちなみに、『一寸法師』『鉢かづき』は長谷の観音や住吉明神の靈験を語る。住吉物語はその両所が出て来る継子譚。『鉢かづき』は川端の東大卒業論文に取り上げる（注8）。

- (3) 養父と娘の關係については、原善「川端康成と竹取物語―疑似インセストとしての「古都」―」に研究史を踏まえた整理がある（『川端文学の世界』4 その背景「所収、一九九九年」）。ただし私見は、『古都』や竹取物語に「疑似インセスト」の要素があるとは考えない。竹取物語には、翁が姫に男女一人人間の道を教え、求婚を受け入れるよう勧めるくじりがある。五人の熱心な求婚者は、今は秀男、真一、竜助らになぞらえる。

- (4) 植物園は「この四月から」再開したとある。新聞連載の昭和三十六年である。學藝書林版『京都の歴史』9 世界の京都昭和五十一年によると、大正十二年（一九二三）に開園したが、第二次大戦後、米軍に接収された。竹笹類見本園など「七割の木が伐られ」、「ボタニカルガーデン」行きの米軍バスが往来するだけの、市民から隔離された存在となり、十年余り「アメリカさん」の住む場所となっていた。昭和三十一年、返還が決定した。

- (5) 前掲『京都の歴史』に、杉丸太の生産は古く応永年間（一三九四～一四二八）に始まったが、戦後「一躍発展をみせ」「専ら床柱や垂木の生産を主とした計画的経営を行なって、連年収穫をあげるようになった」とある。左に引用する。

中心地である中川北山町は、町の総面積四九七ヘクタールのうち、山林面積が四九〇ヘクタールという山地で、総戸数百二十四戸のうち、林業家が八十九戸を占め、全町あげて林業に取り組んでいる。年間の生産高は、丸太約十萬本、垂木約五萬本で、育苗や植栽から、下刈り、枝打ち、除間伐の造林、それに加工、販売までを林業家が独自で行なう経営方法をとっている。このため、単位当たりの収益は多く、山林のみで生計が維持されている。それは自然的・地理的条件に恵まれたうえに、すぐれた伝統的技術に支えられ、しかもさらにその改良が進められているからである（『北山林業』）。

- (6) 京都市編『京都』の巻頭の文章、淡交新社刊。後に大佛の生前最後の随筆集『冬の花』昭和四十八年に収められた。大冊『京都』はおそらく『古都』取材中の出版物として最も重要な一冊であつたのだろう。他の執筆者は林屋辰三郎、奈良本辰也、伊吹武彦ら六名。多数の写真の中には、娘たちによる「北山のみがき丸太」の一葉などもある。なお大佛は川端より二つ年上で、京都に關係する著作、随筆等を多く遺した。昭和二十四年、川端は『帰郷』の推賞文を書いた（大佛次郎氏の『帰郷』、『全集』第二十四巻）。

- (7) 完結後の『古都』を書き終へて「昭和三十七年、『全集』第三十三巻所収。曰く、「なほ書きつづけてゆくと、「古都」は様相を変へて必然二人の娘の悲恋、悲劇になつてゆくであらう」。私的な蛇足を加えれば、もしそれぞれが結婚するとなれば、

小説における姉・妹の「孤独」は薄らぎ、普通の娘の「幸せ」が期待される展開になるであろう。一つ木の生命観はしかしそういう世俗の「救われ」とは無縁である。

- (8) 大正十三年（一九二四）三月の東大卒業論文。同年五月発行の「国語と国文学」創刊号に、大正十三年度卒業論文の題目一覧を掲げるが、それによると「各時代小説作家の人生観及び芸術観より観たる日本小説史小論」。ちなみに同期生の論題は、手塚昇（源氏物語）山岸徳平（落窪物語）片岡良一（西鶴）重友毅（式亭三馬）など。関東大震災は前年九月一日であった。
- (9) 非凡閣版は、「竹取物語解説」「堤中納言物語解説」と、二書の現代語訳を収める（内題に「竹取物語解説と鑑賞」ともある）。また一九九八年新潮文庫版『現代語訳 竹取物語』は、現代語訳と「解説」部分を収める。「解説」末尾の参考書目中に、山岸徳平「物語の本質」と、手塚昇「竹取物語の研究」がある。

〔付記〕 高校の図書室に『古都』の単行本があった。後に新潮文庫版でも読んだが、その頃の印象はほとんど残っていない。先に読んだ『雪国』の印象が強かったため、穏やかな日常世界が退屈に感じられたのであろう。東山魁夷の絵にも魅せられたが、小説における木の意味には思い至らなかった。五十年を経て読み返し、作家の根の思想と言葉に初めて目を開かれた。啓示のような「木と花の生命観」である。古風で枯れた文体が女性の情感を精妙にとらえている。しばしば「しけど……」で止める京言葉もゆかしくやわらかい。新聞小説の通俗は免れないが、こんな女性が現実にいるのかと思わせるほどの完璧なつくりようである。川端の晩期六十歳代初めの、『眠れる美女』と好対照をなす美しい名作であると思う。

（二〇一四年五月三日）